

生徒指導資料

4年

規範意識を高め、自己指導力を育てる生徒指導の授業研究

1 生徒指導とは

自己指導力 (→生きる力) を育てること → 自己実現

- ・「生徒指導とは、本来、一人ひとりの生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力を育成し、さらに、将来において社会的に自己実現できるような資質・能力を育成していくための指導・支援であり、個々の生徒の自己指導力の育成を目指すものである。」
(文部省生徒指導資料20集より・抜粋)
- ・ 21世紀に生きる子どもの資質・能力＝「変化の激しい社会を『生きる力』」
(第15期中央教育審議会の第1次答申・H8年7月)
- ・ 「『生きる力』を育てるには、豊かな直接生活体験の機会、さまざまな問題解決の機会を提供して、子どもが自分で考え、自分で決めて、自分で体験・実践して問題解決に取り組む学習を通し自己指導力を身につけることの繰り返しが必要である」
- ・ 「生徒指導は教育のすべてにかかわる活動であり、子どもの自己実現を援助する活動」
(「教師の力量を高める 生徒指導・学校カウンセリングワークブック」清水勇・樺澤徹二著・学事出版)

(1) 生徒指導の目標は、「自己指導力」を育成すること

「自己指導力」→「生きる力」の育成に→「自己実現」(＝最高の成果を達成しようとする傾向)
(＝自ら、課題発見し、思考・判断・行動・問題解決能力)

○「自己指導力」とは

- ・その時、その場で、どのような行動がもっとも適切であるかを、子ども自身が考え、自主的・自発的・自律的に決断して実行することができる力
- ・自己を見つめ、自己を理解して、自己決定をしていく力 (自らの行動を決定し、実行する力)

- ・自分にとっても、他人にとっても、ベスト（最善・最適）な価値を選択・判断し、行動をすることができる力
 - ・自分を見つめ、自分のあり方を自分で決めて、自分らしく生きていく力
 - ・自分を生かすことだけでなく、みんなのためになるように自己決定して行動できる力
- 「自己指導力」を育てるには→適切な教師の指導・支援が必要

「自己指導力」を育てるための適切な支援とは・・・

～文部省「生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導」（S63年）より～

- ① 子どもが自己決定できる機会（場）を用意する→自尊感情にも
相手（みんな・集団）と自分の両方を考えて、よりよい自己決定ができるように
- ② 子どもに自己存在感・自己有用感を与える→自尊感情にも
子どもが自分の属する集団の中で自分がどれだけ大切な存在であり、自分がどれだけその集団に役立っている存在かを認識できるように
- ③ 共感的な人間関係を育てる→自尊感情にも
相互に人間として無条件に尊重し合う態度で、ありのままの自分を語り、共感的に理解し合う人間関係を

以上の3点を「**生徒指導の3機能**」と名づける。

つまり、

自己指導力を育てるには、①～③の「生徒指導の3機能」を含んだ活動を仕組みと、考える。

- (2) **生徒指導は、「領域」でなく「機能」**→各教科・道徳・特別活動など、教育課程・学校教育の全てに関連
- (3) **生徒指導は、全ての子どもを対象にしている**
単に問題行動や非行の防止・矯正といった消極的なものでなく、すべての子どもの健全な人格の発達という積極的なものを目指す。
- (4) **生徒指導のねらいである「自己指導力」を育てるには、「規範意識」を高めることなしにはできない**
自己指導力の基底・基盤、核、善悪の価値判断の基準になるもの…「**規範意識**」

- ・「何を基準」に価値判断・決定・行動するか？
- ・ルールやマナー・モラルの大切さを理解し、高まったところの「規範意識」が正しい
(高い)「自己指導力」の基盤になければならない。
- ・つまり、自己指導力と規範意識とは、密接不可分の関係にある。

すなわち、

「規範意識」が高まれば、「自己指導力」も育っていく

○ なぜ、今、「規範意識」なのか

近年、「規範意識の低下」が教育的課題として、しばしば指摘されている。

- ・「改正・教育基本法前文」「学校教育法」から
- ・福岡県の調査・研究から
- ・様々な子どもの実態・調査結果から
- ・昨今の大人社会の世相・事件やニュースからも…
→自己中心的な考えを「個人の自由」「個性」とはき違えた風潮が横行
→子ども達は、そんな大人社会の中で生きている…

○ 「規範意識」とは

～文科省及び警視庁「児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料」（2006）より～

- ・「規範」＝「人間が行動したり判断したりする時に従うべき価値判断の基準」
- ・「規範意識」＝「そのような規範を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識」→ルールやマナー・モラルの大切さを理解し、判断・行動しようとする意識
- ・「私」（自己）を大切にしつつ、「公」（他者）を最大に尊重して価値判断・行動しようとする意識 →「自己の確立」と「共に生きる」という二つの車輪（中央教育審議会教育課程部会の審議のまとめ・2007）

「公」を無視した「私」は？→「社会性」のない「個性」は単なる「わがまま」

「私」を完全無視・否定した「公」は？→規範意識が高い、とは言えない

「他人の不幸の上に、自分の幸せを築くことはしない」という確固たる価値観

○ 「規範意識に関する実態調査」（H16、県内児童・生徒1500名対象）の結果から次の3点が明らかになっている。

すなわち、「規範意識の高い子ども」には、

- ① **社会的な体験**が豊富
- ② 他者とのかかわりの中で**存在感**を感じている
- ③ **他者からの期待**を強く認識している

の「3点の特徴」がある。

ある調査結果（H19.4）からも…

「学校のきまり・規則を守っている子どもの方が、正答率が高い」

(規範意識)

(学力)

→「学力の高い子どもの方が、規範意識が高い」とも言える
自己存在感・(自尊感情等)・他者からの期待を感じている

つまり、

「規範意識」を高めるには、これらの「3点の特徴」を生かした教育を充実させる

このことは、逆に考えれば十分理解できる。

昨今の、社会を震撼させる事件（東京・秋葉原、八王子などの無差別殺人事件など）に共通することは…

- ・ 劣等感・自己嫌悪感→自暴自棄「誰でもよかった」「早く捕まって、死刑になりたかった」
⇔欠落…自尊感情・自己肯定感、**自己存在感**・自己有用感
(他者とのかかわりの中で**存在感**を感じている)
- ・ 「誰からにも理解されず、認められない」「期待されない」との思い→孤独・孤立・疎外感
⇔欠落…**自己存在感**・自己有用感(他者とのかかわりの中で**存在感**を感じている)
⇔欠落…**他者からの期待**を強く認識している (**共感的な人間関係**)
- ・ 人と人との関わりの希薄→インターネットへの書き込み等に逃避
⇔欠落…**社会的な体験**が豊富

これらの犯罪を犯す人達は、それまでは、「殺人」(＝規範意識の低下)をした訳ではなかった
→「殺人は悪いこと・犯罪」ということを、ちゃんと認識していたのだと考えられる。つまり、
それまでは一応の「規範意識」があった→では、なぜ、突然、事件を？彼らの心の中の「**規範意識**」を低くし、「犯罪」という「**行動**」へと突き動かしたのは何だったのか？→**劣等感・自己**

嫌悪感、自暴自棄（やけくそ）、孤独・孤立・疎外感など・・・「自尊感情の低さ」が根底にある

同じ人間である「私達」にも、同じ条件が整えば、同じ危うさがあるのでは・・・？ →自分に当てはめて想像してみれば分かりやすい

（子どもも、人との関わりの中で、「心」が満たされていない子・自己が確立していない子は、いじめ・万引きなど問題行動を起こす事がある）

「内面化した規範を行動として表出するには、動機付けとしての、『達成感』、『他者からの期待感』、『自己有用感』の三つの『感』が必要」 →この三つの「感」が実感できるような手立てをあらゆる教育活動の中で工夫することが大切、と。

（「規範的な行動を促す指導の手引き」（H20.3、県教育委員会・県教育センター）

つまり、

「ルールやマナー・モラルは大切に守るべき」との「知」（「理」）があっても、自分の規範意識を支え、行動化しようとする「情」が満たされていないと、規範意識を高めることはできない。

このようなことから、

- ・規範意識の低い子（人）は、「3つの特徴」が欠落している。
- ・規範意識を高めるには、「知」とともに「情」に焦点を。

○「3点の特徴」（「三つの感」）と「3機能」の関連性は

「三つの感」や「3機能」は、どちらかと言うと、「知」でなくて、「情」の育成に焦点をあてた見方である、と考える。

また、当然の事ながら、規範意識を高めるのに欠かせない「3点の特徴」は、自己指導力を育てる「3機能」とも重なる点がかかなり多いと考える。

すなわち、

- ① 社会的な体験が豊富 → GWTなど、学校で意図的に「交流・体験の場」を設定
- ② 他者とのかかわりの中で存在感を感じている → 自己決定 → 自己存在感 → 自尊感情
- ③ 他者からの期待を強く認識している → 共感的人間関係 → 自己存在感（有用感）
→ 自尊感情

そこで、本研修では、

規範意識を高め、自己指導力を育てる生徒指導の授業研究

をテーマに掲げたい。



仮説

「生徒指導の3機能」を含んだ活動を展開すれば、「規範意識」が高まり、「自己指導力」を育てることができるであろう。

○ 仮説に対する1年間を通しての計画・実践

(1) 教師のカウンセリングマインドを生かした児童への関わりから

- ・教師が意識して、どんな小さなことでも努めて大きくほめるようにする。一筆箋・連絡帳・電話・すばらしいで賞・その他、学習場面での称賛。個人的な声かけ。(自己存在感など)
- ・「帰りの会」で「友達のいいところ・がんばったこと」を発表する機会をつくり、友達のよさに気づくように促していく。(共感的人間関係など)
- ・自主的自治的運営・創意工夫する力を育て、連帯感・達成感を味わわせるために、係の企画・運営・進行による学級集会・イベントを行う。学級会の場を大切に、「全員参加の原則」で「仲良く」「協力できる」ことを重視。(自己存在感・共感的人間関係・自己決定)
- ・様々な機会に実行委員会・PT(プロジェクトチーム)を発足、また日常的には係活動を推進し、リーダーを育成したり、より多くの児童に活躍の場を与えたりする。(自己存在感など)

◎ グループ・ワーク・トレーニング G W T・構成的・グループ・エンカウンター S G E・ソーシャル・スキル・トレーニング S S T 等の実施。(自己存在感・共感的人間関係・自己決定) 《本時》

- ・道徳における「モラルジレンマ」をはじめ、授業場面で話し合い活動や討論などを取り入れる。(自己決定・自己存在感・共感的人間関係)

以上の事から、本研究の考え方としては、

- 「自己指導力」は、年間を通して育てていくものである。
- 基盤である「規範意識」が高まれば、その「自己指導力」も育つはずである。
- 「自己指導力」は概念が広く、イメージしにくい、「規範意識」は概念が狭く、身近で、イメージしやすい。
- 本時授業では、「規範意識」が高まれば、「自己指導力」も育つことができる

・・・と考える。

そこで、本時授業では、目標を「規範意識を高める」に置き、下記のように「本時の仮説」をたてると、・・・

本時授業の仮説

「生徒指導の3機能」を含んだ活動を展開すれば、「規範意識」が高まるであろう。

(→「規範意識」が高まれば、「自己指導力」を育てることができるであろう、との考え方を含む)

本時授業の視点

手立て(支援)である「生徒指導の3機能」に沿った子どもの言動が出れば、「規範意識」が高まったひとつの姿であろう、という本時仮説の考え方から…

- ・ **規範意識が高まったと言える子どもの発言や行動が見られたか?**
(=話し合いのルールやマナー・モラルを守ろうという意識と行動、友達への配慮・思いやりの発言や行動などがあつたか?)
- ・ **規範意識を高めるための支援(手立て)である「3機能」は有効であつたか?**
(=手立てとしての「3機能」に沿った子どもの発言や行動が、見られたか?)

2 なぜ、生徒指導で、GWT (グループワークトレーニング) か

○ GWTとは

グループワークとは「グループそのものを活用資源としてトレーナーがグループに働きかけ、グループ過程をとおり、グループの力動、相互作用を利用して、**メンバーの人的成長**をはかり、彼らの**思考・態度・行動・感情に変化**を起こさせるとともに、**社会的適応**をはかる教育的、または治療的な過程」であり、できるだけリラックスした**雰囲気**の中で自分の姿に気づき、**自ら態度・行動を変容**させていくことを**目的**とし、また、それらを**体験的に学んでいくプログラム**である。

○ GWTのよさ

- (1) **仲間づくり(人間交流)**や**グループづくり**ができる。
- (2) **グループ・プロセス**に気づき、**集団**の中で効果的に役割を果たす技能を養成することができる。
- (3) **自己への気づきと態度の変容**が生まれやすい。
- (4) **組織の問題解決と活性化**などの目的に使える。

○ 学校教育の中でのGWTの必要性

GWTの基本理念は「できるだけリラックスした雰囲気の中で自分の姿に気づき、自らの態度、行動を変容させていくこと」である。

子ども達は、学校教育の中で、学級、班活動、クラブ活動、委員会活動などさまざまなグループに所属し、活動しており、その中で「**パティシペイターシップ**」(**集団・組織に義**

務的に参加したり、お客様の参加するのではなく、自ら進んで積極的に参加し、責任を分担する協働者が養われていくことが理想であるが、グループ活動が多岐にわたったり、不明確であったりして、メンバー一人ひとりをフォローすることは、不可能に近い。

例えば、ある班活動において、リーダー格の子や発言力のある子・学力の高いなど、一部の子が中心的に進め、班をまとめてしまうことがよく見られる。

そこで、別の場面で、グループワークのトレーニングをし、パティシペイターシップを養っていくことは、有効な方法である。

GWTには、ルール（話し合いのやくそく）やシステムの中に、「話せる子」も「寡黙な子」も、「学力の高い子」も「学力の低い子」も、全員が主体的に参加し、その子なりの責任を持って、グループ活動に参加せざるを得ない「しくみ」になっているのが特徴である。

そして、GWTというトレーニングを通して、自ら気づいたことは、日常生活やふだんのグループ活動の中にも一般化され、生かされていくことになる。

また、GWTを行うと、それぞれの流れの中で、全員が、自己決定する場面があり、自己理解、他者理解を通して、共感的人間関係を促したり、グループの一員として行動する中で自己存在感を感じたりすることができる。すなわち、GWTという形態・活動そのものが、「3機能」を含み、「支援方法」となっているのである。

「3機能」が「全員」へ向けられているという点が、GWTの大きな特徴であり、他の一般的なグループ活動との違いである。

また、3つの留意点のうち、何を重点的にねらうかによって、プログラムを選ぶことができる。

（「情報を組み立てるGWT」「力を合わせるGWT」「聴き方を学ぶGWT」「コンセンサスの良さを学ぶGWT」など、クラスの集団形成の局面に対応して用意されている。

本時は、子ども達の実態を踏まえ、「一人ひとりの持っている情報を伝え合い、組み立て、協力し合って課題を達成することを目的」としている、「情報を組み立てるGWT」を選んだ。）

よって、GWTは、規範意識を高め、自己指導力（他人もよし、自分もよしの関係の中でもっとよい行動をする力）を育てるためのひとつの有効的な手段であると考えられる。

第4学年 生徒指導の機能を生かす学級活動指導案

1 活動名 伝え合おう 聴き合おう ～ムシムシ教室の席がえ

2 指導観

(1) 児童について

本学級は、〇名（男子〇名、女子〇名）である。大変明るくて、素直で、活発、元気にあふれている。何事にも前向きで、非常に意欲的である。しかし、子どもの中には引っ込み思案なところも見受けられ、自己表現などの場面では、返事などの声も小さくなりがちな子の姿もあり、特に女子の中に見られる。

また、発達障害（高機能自閉症・アスペルガー症候群）のため、情緒学級に通級している子もいる。

全体的にも、子ども達は進んであいさつをする子が多いなど、ほめられるような行動をすることが大変多い。一方で、元気なあまり、友達間や集団行動についてのトラブルや衝突も見受けられる。また、「友達の話をしっかり聞く」態度が十分に育っているとは言えない。

話し合いや討論など「全体の間」では、「聞く」「話す」「話し合う」態度は、少しずつ、身につけてきている。全体の間では、繰り返し、訓練し、また教師が支援しやすく、軌道修正できるという事も関係しているからであると考えられる。しかし、「小グループ」での交流などでは、「伝え合い」「聴き合い」が十分に育っているとは言えない。

また、子ども全体的には、大変素直で前向きだが、時としてルールや約束が守られず、注意や指摘・指導する場面も少なくなく、規範意識が高い、とは言いがたいところがある。

子ども達一人ひとりが、例外なく、一定のルールや約束を守りながら、自分に自信を持ち、お互いを深く理解し合い、認め合い、それぞれの良さに気づく学級づくりが必要であると考えられる。

このようなことから、友達の考えをしっかりと聴き、自分の考えも言葉で伝えながら、自他共によさを生かしつつ、グループとしての協力することの楽しさ・友達の良さや認め合う大切さに気づく体験が不足し、最も求められていると痛感する。

(2) 活動について

本活動「ムシムシ教室の席がえ」は、「情報カード」をもとに、グループの中で子ども達が複数の「ムシカード」を操作して、席がえを完成させていく活動である。

児童にとって、「ムシ」を題材にした本活動は、身近で興味を持ちやすく、逆に4年生としては、簡単すぎている印象を受けやすいが、内容的には、かなり高度である。与えられた「情報カード」を一定のルールに沿いながら、操作するのであるが、そこには、自分のカードの内容（情報）をしっかりと伝え、同時に友達からの情報を正確に聴き取る力と態度が求められる。「話せない子」も「聞けない子」も、お互いの情報を生かし、交換せざるを得ず、相手を認める態度が必要である。さらには、様々な情報を結集し、まとめあげる活動になっている。「ルー

ル」を守ることは、「規範意識」の基礎につながるとも考える。

つまり、「話す」「聴く」力のみならず、「ルール」を守ること・「協力」することなしでは、達成できない活動になっており、本学級の児童にとって非常に意義のある題材である、と考える。

(3) 方法について

授業にあたっては、まず、5人グループで、交流しやすいように、机を囲んで向き合わせるようにする。

まず、全体場で、説明をした上で、「話し合いのやくそく」を教師の方から提示し、クラスの約束として、板書して確認するようにする。

また、子ども達が話し合いの際に、意識したり、振り返ったりできるように、今までのGWTの経験で得た財産である「話し合いのポイント」を掲示しておくようにする。

さらに、一人ひとりが意識して、スムーズに活動（話し合い）の目標を達成できるように、個々人にも「めあて」を持たせ、代表が発表するようにしたい。

このことにより、話し合い円滑に、且ついい方向に向かうように、協力しやすい土壌・雰囲気を作りたい。

子ども達が活動している時は、机間巡視をし、「やくそく」が守られているか声かけや助言をしたり、話し合いにおけるよさなどを認めたりしながら、子ども達にも気づかせていくようにする。

ふり返りの場においては、「聴く」「話す」「協力」などの点で自他を振り返られるように、「ふり返りシート」を用意し、記入させるようにする。

3 本時 平成20年10月 4年教室にて

4 本時目標

- 小グループの中で、人の話をよく聴いたり、タイミングよく話をしたりすることの大切さを体験する。
- 様々な情報を集め、まとめる方法を体験する。
- 自分の話し合いの姿勢を振り返り、協力することの大切さやよさに気づくようにする。

5 生徒指導の視点に立った本時授業の工夫

- **規範意識**を高め、**自己指導力**を育てるための本時の価値

本教材でのねらいは、人の話を正しく聴き、自分の意見をしっかり話し、伝えながら、個々人の持つ複数の情報を目的にそって、整理し、まとめあげていく活動である。

「話す」ことはできても、「聴く」ということは、相手への「思いやり」なくしてはできないことである。また、皆に自分の持つ情報を分かりやすく、正しく「伝える」ことは、**相手への立場に立った配慮**が必要で、そこにも自然と**「思いやり」の態度**を必要とするものとするものとする。

また、「話し合いのやくそく」を意識し、守らせることは、「ルール」を守ることの大切さに気づくことを促す貴重な体験であるものとする。

つまり、「伝え合い」「聴き合い」は、「自分中心（私）」では達成できず、一定の「ルールや約束」を遵守しながら、「友達やみんな（公）のため」を考えるような態度、すなわち「規範意識」が必要である。

「社会性」（公）のない「個」（私）は、「わがまま」に通じる、と考える。

また、活動を通して、「自分本位」でなく「協力」「協調」を学ぶ絶好の教材である。

このように、相手への意見に耳を傾け、相手に伝わるように自分の意見をしっかりと伝えるような活動を仕組むこと、ルールを守ること、協力することなどは、自分本位な態度を廃し、グループ共通の価値を求め、すなわち「規範意識」を高めるのに、価値がある。

また、次のように「生徒指導の3機能」をも含み、「自己指導力」を育てるに適した活動である。

○ 生徒指導の3機能を持たせるための工夫 → 具体的には、「本時の展開」に明記

グループの中で自由に自分の考えを持ち、出し合う機会を設け、そのよさを承認してもらい、意見交流の場を設定するようにする。

① 自己存在感（自己有用感）を持たせる

グループの中で、友達との関わり合いの中で自分の情報を伝え、そのよさを承認してもらい、グループの中で生かしていけることに気づくことができるようにする。

② 共感的人間関係を育てる

グループの中で、自由に自分の考えを出せるようにし、また友達の考えも聴きながら、そのよさを認め、共によりよい関係を築いていけるような場の設定をする。

また、見つける手がかりとなった人の意見や話し合い活動をスムーズにいくように活動した人を見つけ、称賛していくことで、他者理解や自己理解の大切さを学ばせる。

③ 自己決定の場を設定する

グループの中で、友達の話をしっかり聴いて考えたり、自分の持つ情報や考え・意見を伝え合ったりする中で、ムシ達の席を見つけることで自己決定させる。

(5) 評価の工夫

- ・ 繰り返しの場においては、「聴く」「話す」「協力」などの点で自分を振り返られるように、「振り返りシート」を全員分用意し、記入させるようにする。
- ・ グループでお互いのよさを出し合い、お互いのよさに気づき合えるように、個人用とは別に、グループ用の物を一枚、用意をし、話し合いながら記入させるようにする。

(自己存在感（自己有用感）・共感的人間関係・自己決定)

6 本時指導の考え方

本時学習では、小グループの中で、情報カードをもとに、友達の話をよく聴いたり、しっかりと伝えたりすることの大切さや、複数の情報を集め、まとめる方法を体験し、気づくことがで

きるようにすることをねらいとしている。

はじめに、グループ（5人）で交流しやすいように、机を囲んで向き合わせるようにする。

全体の場で、本時活動の説明とめあてを知らせ、学習の見通しをしっかりと持たせて活動に取り組めるようにしたい。また、一人ひとりが意識して、スムーズに活動（話し合い）の目標を達成できるように、個々人にも「めあて」を持たせ、代表が発表するようにしたい。

次に、「指示書」「座席表」「情報カード」（ヒントカード）「ムシカード」を配り、「指示書」を読み上げる。質問を受け付けた後、「情報カード」（ヒントカード）は、裏返しにしたまま、トランプのように切って、みんなに配るように説明・指示し、「話し合いのやくそく」を教師の方から提示し、板書して確認するようにする。

全体の場で確認が終わった後、グループごとに一斉に活動をしていく。その際、教師は、机間巡視をしながら、「話し合いのめあて」に合った活動ができているか、「話し合いの約束」がしっかり守られているか、グループを見てまわる。「約束」が忘れられていたり、やり方がわからない子に対しては、声かけや助言をしたり、話し合いのよさを見つけ、認めたりしながら、活動がスムーズに流れるようにしていきたい。

ふり返りの場においては、「正解」を配り、一つ一つ、答え合わせをし、確かめていく。その後、「ふり返しシート」を配り、「聴く」「話す」「協力」などの点で自身や自分たちのグループを振り返られるように記入させるようにする。そのことで、自分を振り返ることや、友達やグループのよさ、そしてお互いが協力し、支え合うことの大切さに気づかせていけるようにしたい。

最後に、代表の子にふり返しシートに書いたことを発表させ、感じたことや学んだことを全体に発表させたり、子どもの気づかなかったよいところを知らせたりすることで、共感的な人間関係を高めることにもつなげていきたい。

7 準備

教師・・・ムシ達の座席表・正解・話し合いの約束・話し合いのポイント（黒板貼り付け用の大型版）

児童・・・筆記用具・指示書（1グループ1枚）・ムシ達の座席表（1グループ1枚）・情報カード（1グループ1セット）・ムシカード（1グループ1セット）・正解（1グループ1枚）・ふり返しシート（メンバー用全員分と1グループ1枚分）

8 本時の展開

学 習 活 動 と 内 容	生徒指導の視点に立った支援
<p>1 本時のめあてをつかむ。</p> <p>(1) 今日のGWTの内容とルールを確認をする。</p> <p>① 指示書を配り，読み上げる。</p> <p>② 座席表・情報カード・ムシカードの確認。</p> <p>③ 「話し合いのやくそく」を確認。</p> <p>(2) 今日のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>みんなで話し合っ、席がえをしたムシ達の正しい席を見つけ、完成させよう。</p> </div> <p>2 「ムシムシ教室の席がえ」(GWT)をグループで始める。</p> <p>(1) 「話し合いのポイント」を参考にして，話し合いの際の「自分のめあて」を決め，代表が発表する。</p> <p>(2) 活動に取り組む。</p> <p>○ 友達の情報をよく聴きながら，自分の情報を正しく伝える。</p> <p>○ 話し合いながら，席をみつけていく。</p> <p>○ わかったムシカードは，座席表にどんどん置いていく。</p> <p>○ 完成したら，座席表に鉛筆で「記入」してみる。</p> <p>3 正解を知り，活動についてふり返る。</p> <p>(1) 答え合わせをする。</p> <p>○ 正解を見て，答えを確かめる。</p>	<p>○ GWTの内容とルール・約束など理解し，見通しを持って活動に取り組むようにさせる。</p> <p>○ 「やくそく」を提示することで，一定のルールを守れるよう意識させる。【規範意識】</p> <p>○ グループ(5人)で顔(表情)を見て，交流しやすいように，机を囲んで向き合わせるようにする。【自己存在感】【共感的人間関係】</p> <p>○ 自分なりの「話し合いのめあて」を決めさせる。【自己決定】【規範意識】</p> <p>○ 友達の情報をよく聴き，自分の情報をしっかり伝えると共に，自由に意見を言えるように，「やくそく」や「めあて」を持たせ，グループ内での場を保障する。【自己存在感】【共感的人間関係】</p> <p>○ 自分が持っている情報を自由に，正しく伝えるようにする。【自己存在感】</p> <p>○ ルールを守り，グループの人と協力しながら，課題を解決できるように，机間巡視などして，声かけをする。【共感的人間関係】【規範意識】</p> <p>○ グループの人のカードの情報(ヒント)から明らかになった順にムシカードを座席表に置かせる。【自己決定】</p> <p>○ 机間巡視をしながら，問題に行き詰ったグループには，簡単なアドバイスをする。</p>

<p>(2) 活動のふり返りをする。</p> <p>① ふり返りシートに書く。 (グループ用→メンバー個人用)</p> <p>② シートをもとに、代表が発表し、活動をふり返る。</p> <p>4 先生の話を書く。</p>	<p>○見つけた手がかりを振り返りシートに書くようにさせる。</p> <p>○はじめに、グループで話し合う機会を持たせ、お互いのよさに気づきやすいように、グループ用のプリントから記入させるようにする。 【自己決定】【自己存在感】【共感的人間関係】</p> <p>○振り返りをさせ、代表が発表させることで、よかったことを学級集団で共有させ、これからの生活に生かせるようにする。【規範意識】【自己決定】【自己存在感】【共感的人間関係】</p> <p>○子どもが気づかないよさを紹介することで、自分・友達・集団のよさに気づかせる。 【自己存在感】【共感的人間関係】</p>
--	---

9 先生方に見ていただきたい「参観の視点」

なるべく、どこか、1つのグループを集中的に見て、子ども達の発言や行動を観察して下さい。

「生徒指導の視点に立った本時授業の工夫」が有効であったか。

本時授業・参観の視点

手立て(支援)である「生徒指導の3機能」に沿った子どもの言動が出れば、「規範意識」が高まったひとつの姿であろう、という本時仮説の考え方から…

<p>(1) 規範意識が高まったと言える子どもの発言や行動が見られたか? (=話し合いのルールやマナー・モラルを守ろうという意識と行動, 友達への配慮・思いやりの発言や行動などがあつたか?)</p> <p>(2) 規範意識を高めるための支援(手立て)である「3機能」は有効であつたか? (=手立てとしての「3機能」に沿った子どもの発言や行動が, 見られたか?)</p> <p>(3) 評価の工夫(振り返りシート2種類)は, 有効であつたか(3機能の視点から)?</p>
